

6 五感で感じる阿蘇の息吹



北里 康二
KITAZATO Yasuji

公益財団法人阿蘇地域振興デザインセンター
事務局員

熊本の観光名所、阿蘇山。雄大な自然が広がる一帯には、世界有数のカルデラや、草千里を代表とする景観など、熊本の魅力を感じさせる場所が多く存在する。阿蘇地域の自然を守り、観光開発と環境保全をとおして、阿蘇の魅力を発信する活動を紹介する。

自然の猛威と恩恵

まだ、私たちの記憶に新しい平成30年7月の「西日本豪雨」。自然の猛威は、私たちの暮らしを荒々しく襲った。活発な梅雨前線により、大雨特別警報が発令され、この集中豪雨は14府県で死者・安否不明者合わせて200人を超える甚大な被害をもたらした。かけがえない失われた命、ただただ、ご冥福を祈るばかりである。

私が暮らす阿蘇も度々台風や豪雨による洪水、山腹崩壊、さらには噴火の災害を受け続け、平成28年4月14日と16日には震度7の連発地震に襲われた。人的被害は関連死を含め200人を超え、14日の発震は前震と呼ばれた。前震という言葉は、私が記憶する限りでは、この熊本地震で初めて聞いたと思う。

熊本県小国町出身の坂本善三画伯は「どんな秩序も自然の秩序にはかなわない」と、自然と対峙する姿勢を

話されたそうである。豪雨や地震が自然の秩序と関係あるのか簡単に判断はできないが、この7月の猛暑、異常気象では、熱中症の疑いなど7府県で9人が死亡、気象庁も「災害と認識」するなど、経済活動優先で、快適な生活を求めてきた地球温暖化の影響があるのだろうと思いたくなる。

世界有数の阿蘇カルデラは、東西18km、南北25km、阿蘇火山が30万年前から4回の大噴火をくりかえし、この巨大なカルデラをつくりあげたのは約9万年前の大噴火といわれ、その火山灰は遠く北海道まで降った堆積物が確認にされている。人々は、様々な自然の猛威と恩恵を受けながら、暮らしてきたのであろう。阿蘇山は活火山であるため、噴火という不安を抱える一方で、豊かな温泉資源や壮大な風景は観光地となっている。ここに暮らす人々は、湧水や草原、森林を管理しながら生



写真1 風にそよぐススキ



写真2 ヒゴタイと阿蘇五岳（産山村）

活を営んできた。

地域連携マネジメント財団の設立

阿蘇地域の自然環境を守りつつ、観光開発と環境保全、地域づくりのマネジメントを行う主体として、平成2年5月に旧阿蘇郡自治体（12町村）と熊本県が出捐し、財団法人阿蘇環境デザインセンターを設立した。事業の広がりを受け、平成10年と平成15年に基本財産（基金）を増額。当初より、当財団には、構成自治体から職員が派遣されている。派遣職員の効果として、各市町村の中では自分のところだけを考えればよかったことが、当センターに派遣されることによって、阿蘇地域の関係市町村、阿蘇くじゅう観光圏としての幅広い視野に立つ位置になり、阿蘇全体の観光振興を推進しながら、地域づくりを図っていくことになる。この一体感を創りあげていくという過程で、行政や民間との連携を深めることになり、派遣職員のスキルアップも期待されている。

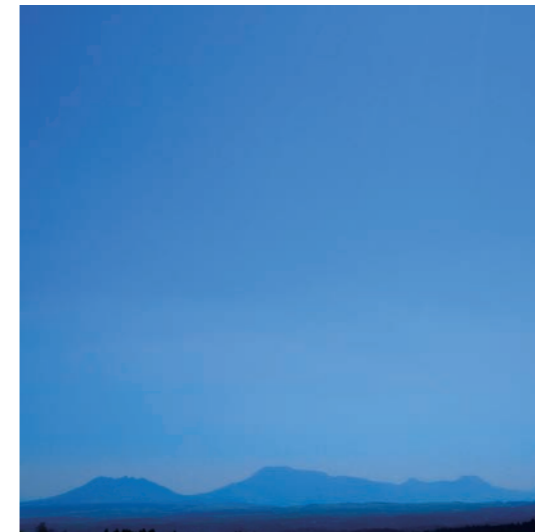


写真3 阿蘇の五岳・涅槃像



写真4 雲海に浮かぶ阿蘇五岳



写真5 中岳火口

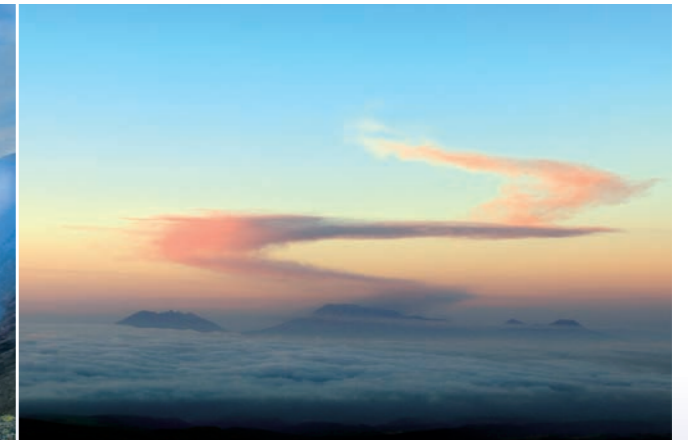


写真6 朝焼けと雲海

当センターは、平成25年4月には公益財団法人阿蘇地域振興デザインセンターに移行し、新たな活動が始まった。

公益事業～財団の取組

阿蘇地域振興デザインセンターでは、3つの公益事業に取り組んでいる。

①豊かな自然による世界ブランドの確立

～阿蘇草原の維持・再生～

阿蘇を代表する雄大な草原とその景観や放牧、農業、水源涵養、観光といった草原の持つ多面的な機能を次世代へ継承する気運を高めていくため、その価値や現状を地域内外に向けて、様々な媒体でPRを行う。草原再生事業を支援し、豊かな自然を守りながら活動していくことが重要になり、阿蘇の貴重な財産である「草原の維持・再生」を中心に、環境・景観保全の促進を進める。

②地域の元気再生による地域力向上

阿蘇地域が抱えている課題として、産業の弱体化や若年層の流出など、生活・生産基盤に影響を及ぼすものが多くある。一方で、内外から阿蘇の環境・景観等の遺産に大きな関心が寄せられている。こうした課題や期待に応えるためには、地域のリーダーとなる人材の育成と、その人材を受け入れる土壌を作る必要がある。課題解決に向けた地域づくり事業や地域資源等を活用した「まちづくり」や「情報発信」あるいは「景観・地域資源の保全」等の活動を

支援することで、地域力の向上を目指している。

③広域連携による競争力のある観光地づくり

国際競争力の高い魅力ある観光地域を形成するため、地域独自の歴史・伝統・文化を活かした「ブランド」の確立を促進し、「日本の顔」となる観光地づくりを推進している。

阿蘇地域は観光圏整備法に基づき、大分県竹田市及び宮崎県高千穂町と県境を越えた広域連携による「阿蘇くじゅう観光圏」を形成。阿蘇くじゅう国立公園などを活かした自然、温泉、歴史文化を連携させたブランドコンセプトである「阿蘇カルデラ ～命きらめく草原の王冠～」のもと、地域経済の活性化を促進し、滞在交流型の観光地づくりを進めている。自然景観をはじめとする地域資源を活用した旅行商品などのコンテンツづくりや地域が一体となった受け入れ体制の強化を進めながら、競争力のある観光地づくりを目指している。

あそフラワーツーリズム～「手軽さ・身軽さ・気軽さ」

当財団では里の美しさを創造する事業、熊本県の「平成29年度くまもと里モンプロジェクト」の補助を受け、熊本地震後の景観づくりの一環として、「あそフラワーツーリズム」に取組んだ。震災後2年目の春に花を咲かせようというもので、8色のチュウリップを阿蘇管内の道の駅や観光地等に、地域住民や小中高生、ボランティアの大学生などで植栽した。チュウリップは雑草等が生えにくい晩秋から初冬に植付けるため、管理もしやすい。

開花時には観光客を呼び込むためにスマートフォンアプリを活用したスタンプラリーを実施。阿蘇地域内の指定されたチュウリップと桜の前に行き、アプリを起動すれば、自動的にスタンプを取得することができる。3つのスタンプを集めると、メールアドレスの入力画面が表示され、入力すれば応募となり、抽選で安心安全な阿蘇の産品が当たる。スタンプラリーといえば、所定の台紙を持って現地に行きスタンプを押すというのが定番であるが、本イベントではスマートフォンがあれば、簡単に応募できるものとした。

当財団の事務局長が、活動やイベントなど、住民や参加者にとって「手軽さ・身軽さ・気軽さ」



写真7 冬の阿蘇

も大切であると実施した。秋には、紅葉やススキなどを巡る同様のスタンプラリーも企画している。

日本版DMOとして

当財団は平成30年3月30日に「日本版DMO (Destination Management Organization)」として、観光庁に登録された。

日本版DMOは、「観光地経営」の視点に立った広域連携の観光地づくりの舵取り役として、多種多様な関係者と協働しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人である。

この取り組みの一つが「SAKURA QUALITY」の実施である。SAKURA QUALITYはホテルや旅館等の宿泊施設を中心とした観光品質認証制度の名称である。世界中の旅行者に、質の高い日本の観光サービス



写真8 逆さ阿蘇



写真9 放牧

に関する情報提供を行い、安心して快適な旅行を楽しむていただくために、申請のあった宿泊施設などの観光サービスの品質を第三者が評価し、その品質の高さを認証する仕組みである。

旅行者が必要とする質の高い観光サービスに関する情報を発信することにより、旅行者にとってサービス選択の幅が広がるだけでなく、サービスを提供する事業者にとっても、サービスレベルの維持・向上のツールとして活用でき、外国人観光客に対し、宿泊施設の品質やサービスなどの情報を分かりやすく提示できることをめざしている。阿蘇くじゅう観光圏では、SAKURA QUALITYに平成29年度は15施設、平成30年度前期に4施設が参加している。

来訪者満足度調査

観光地にとって旅行者の「旅の満足度」を調査することも大切である。観光庁の推奨調査票に準拠した項目にて、平成28年度と平成29年度の2年間、阿蘇くじゅう観光圏など観光庁認定13の観光圏が同一の調査を実施。調査方法は「調査員による聞き取り調査」と「宿泊施設で配布・郵送回収調査」で夏期と冬期に実施した。

調査の結果、阿蘇くじゅう観光圏において、景観や雰囲気は高く評価されているが、体験プログラムツアーの評価は平均より低い。消費額は日帰りの場合が全国平均より1,000円程度低く、宿泊の場合でも全国平均より7,000円程度低い。体験プログラムへの参加が少ないことが消費額にも影響があるようである。調査データを分析し、今後、体験ツアーのガイド育成の充実を図りたい。

大いなる自然に抱かれた交響楽

自宅から勤務地まで、通勤時間は車で50分。その間、



写真10 野焼き

ストレスの多い都市部のラッシュと違い、阿蘇の自然が大らかに迎えてくれる。野焼きを終えた後、阿蘇の草原が柔らかな緑に被われ、目にやさしくほのかな香りもあり、風にそよぐススキ、神秘的な雲海、阿蘇の息吹を五感で感じるのである。雪に覆われた景色も心を和ませてくれる。大観峰に広がる草原は、朝陽に真っ白に輝き、反射がまぶしい。そして、外輪山の山肌は、集中豪雨や熊本地震で被災した箇所が、まるで傷口を塞ぐ白い包帯でもあてられたように、雪がのこる。緑に被われた季節でも、被災した山肌は分かるのであるが、この冬の風景も痛ましさを感じる。それは、まるで私たちに被災を忘れないで欲しいという自然からの復興へのメッセージではないだろうか。

熊本県小国町出身の彫刻家末田龍介氏は、毎日の生活を樹木に例えるならば、「葉や実、花は経済であり、その根っ子を支えるのは文化である」と新聞インタビューに答えていた。観光振興や地域づくりにおいても、同じことが言えるのではなからうか。それぞれの地域に積み重ねてきた生活文化を守り、その時代の価値観や技術を取り入れ進化させることも大切だと思う。

阿蘇各地域の個性ある魅力を楽しめるならば、金管楽器、木管楽器、弦楽器、打楽器など各パートの旋律を調和させ、訪れた人の心に響く、大いなる自然に抱かれた交響楽を奏でたいものである。

<参考資料>

- 1) 読売新聞ホームページ
- 2) 熊本県ホームページ
- 3) 観光庁ホームページ
- 4) 株式会社アンド・ティ 来訪者満足度調査「阿蘇くじゅう観光圏」報告書

<写真提供>

公益財団法人阿蘇地域振興デザインセンター